

女性を表わすことば

遠藤 織枝

はじめに

1975年の国際婦人年、今年の「国連婦人の10年——1980年世界会議」等を契機に、男女平等、女性の地位の向上を促進するため、いろいろな論議が行われている。私はここで、女性の地位の実態を、ことばの面からとらえてみたいと思う。

女性語の研究として従来は江戸時代の廓など特殊な世界の女性の言葉の研究や、話しことばの中の位相の1つとしての女性語の研究がなされてきた。しかし、ここではそのような女性が用いる言葉としての女性に関する言葉の研究を目指しているのではない。現代日本語の中で、日本の女性がどう位置づけられているか、どう解釈されているかを研究したいと考えているのである。現代日本語の中に女性に関する語——女性を表わす語、女性固有のものとされる語、女性を限定、修飾する語など——として、どのようなものがあるか、それは男性を表わすものとどう違うのか、違いがあるとすれば、それは何に起因しているのか、などの研究を意図しているのである。それが解明されれば、日本語の中での女性の位置づけがわかり、それは日本社会の中での女性の位置づけの究明にもつながっていくと考えられる。社会がことばを生み、またそのことばが現象を規定していくというように、ことばと社会とは、時間的にずれることはあっても、表裏の関係にあるからである。

女性の位置づけを知るには、生理学的、社会学的に、あるいは法律的、歴史的になど、多方面からのアプローチの仕方があるが、「ことば」の面からのアプローチも、女性として、ことばを研究するものとして、興味ある課題だと思われる。

現代日本語と一口に言っても非常に広範囲で莫然としているが、ここでは調査研究の対象を国語辞典に限定した。

国語辞典は、それぞれの編集方針により、重点のおき方に多少の違いはあるが、現代の日本語を反映するものであり、また規範を示すものである。

編集に長年の歳月を要するところから、現代の揺れ動く日本語の実態を忠実に反映しているとはいえないし、あらゆる階層、年齢層のことばが収録さ

れているともいえない。そのため現代語を完全に反映しているとはいえないが、現代日本語の実情を知る上で大きな役割を果たすものの1つであることに変わりはない。

ここでは、中学生から社会人まで一般的に使われている小型国語辞典を研究対象とした。その国語辞典の中で、見出し語の中にどのように「女性」が表現され、規定されているかを調べた（語釈、用例の中での「女性」も研究対象としているが、小論ではふれない）。また、辞典の中の一部の語について、イメージ調査を行なって、それらの語と現代人のうけとめ方を調べた。

対象とした辞典は、『岩波国語辞典、第3版』（第1刷 1979年12月発行）である（以下『岩国』と略記する）。当辞典を選んだ理由は、現在刊行されている小型国語辞典の中で最新のものだからである。

この辞書では、第1版の「はじめに」で述べられているが、「採録語をどこまでも現代生活に必要なものという観点から厳選した」「現象的なものよりその根底にひそむ根本的な意味を明らかにした」ことを特色としている。第3版でもこの方針は踏襲されている。

なお、この辞書から採取した語が『岩国』に特有のもので、普遍性がないものであるということもありうるので、これら採取した語はすべて、小学館『日本国語大辞典』（以下『小日国』と略記する）と照合した。その照合の結果、『岩国』にはあるが、『小日国』にはない、というものは研究対象から除外した（ちなみに、女性を表わす語として、「おかちめんこ」というのが、『岩国』にはあるが、『小日国』では採録されていない。中型の辞典とされる『広辞苑』『広辞林』にも出ていない。小型の辞書では、『新明解国語辞典』には採録され、『旺文社国語辞典』『新潮社国語辞典』『三省堂国語辞典』には採録されていない。なお、これらの辞書は以下『新明解』『旺文社』『新潮』『三省堂』と略記する）。

女性を表わす語として、どのようなものが見出し語に採録されているかを調べるために、ア行の「愛妻」にはじまって、「ワンサガール」に終るまで女性を表わす語を拾い上げていったが、女性を表わす語の特色、傾向を知るためには、比較の対象として男性を表わす語の実態も知らなければならない。そこで「愛息」からはじまる男性を表わす語も並行して拾い上げていった。

こうして採取した語を、表わす内容によっていくつかのグループに分けて

考えることにした。グループに分ける際に、同一語で、2、3のグループにまたがって属する語もあるが、それらの語は、特別な場合以外は最初の語義によってその属するグループを決めた。

また、〔fいも〕〔fせうと〕など、古語の記号がつけられた語は除外した。

〔表1〕 血縁関係を表わす語 (50音順→)

女 性 を 表 わ す 語					
愛 嬢	姉	姉 御	一 女	妹	姉 御
大伯(叔)母	お母さん	お か か	お嬢様	お ば 伯(叔)母	おおさん
おふくろ	家 母	義 姉	義 母	義 妹	愚 母
愚 妹	継 母	賢 母	高祖母	国 母	子 女
次 女	実 姉	実 母	実 妹	慈 母	姉 妹
従 姉	従 姉妹	従 妹	しゅく 叔 母	諸 姉	生 母
聖 母	曾祖母	息 女	祖 母	長 女	ねえ 姉さん
母	ばば 婆	母 上	母 御	母者人	ひばり 曾祖母
悲 母	母 后	母 子	母 堂	まい 〔妹〕	孫 娘
まなむすめ 愛 嬢	マ マ	まはは 継 母	娘	養 女	養 母
令 姉	令 嬢	令 妹			(63語)

男性を表わす語					
愛息	兄	兄貴	一男	大伯(叔父)	お伯(叔父)
おいさん	お父さん	弟	お親 <small>や</small> 父	家兄	家父
雷おやじ	貴兄	義兄	義弟	義父	愚兄
愚息	愚弟	愚父	君父	けいてい兄弟	継父
厳君	賢兄	賢弟	厳父	高祖父	国父
ごしんぶ御親父	次兄	じじ	子息	実兄	実弟
実父	子弟	次男	師父	慈父	舎兄
舎弟	従兄	じゅうけい従兄弟	従弟	しゆくふ叔父	ジュニア
順養子	小弟	諸兄	せがれ	曾祖父	祖父
尊兄	尊父	大兄	太郎	父	仲兄
長兄	長子 <small>はくふ</small>	長男	てい〔弟〕	とと	にい兄さん
二世	はく父	末弟	パ	とと	〔父〕
父君	父子	部屋住	坊ちゃん	ひじ父	息子
〔爺〕	養子	養父	令兄	ままち父	令弟
老兄				継父	(8語)

[A] 血縁関係を表わすもの [表1]

ここには「父」、「いとこ」などの血縁関係を表わす語と「義父」「養母」などの血縁関係に準ずるものを収めた。ただし「兄弟」「親子」のように男性、女性いずれも含まれるものは除外した。漢字母としての見出し語は〔 〕に入れた。〔表1〕によると、女性を表わす語が63語であるのに対して、男性を表わす語が85語と、男性側の語の方が22語、約35%も多い。この差はどこから生じたのであろうか。

女性を表わす語が少ないということは、男性側にはあって女性側にはない概念の語があるということである。そこで女性・男性それぞれの表わす語の特徴をみるため、対応関係を調べ、対応する語がないものについて考えてみることにした。

女性側の「愛嬢」に対して男性側では「愛息」、「姉」には「兄」というように対応関係にあるものは消していくと、女性を表わす語の中で残るものは、次の各語である。

(1) 母に関する語 —— 「賢母」、「生母」、「聖母」、「母上」、「母御」
「母者人」、「悲母」、「母后」、「母堂」…… 9 語

(2) 娘に関する語 —— 「孫娘」、「^{まなむすめ}愛娘」…… 2 語

一方、男性を表わす語で対応関係がなく、残ったものは次の各語である。

(3) 父に関する語 —— 「雷おやじ」、「君父」、「嚴君」、「嚴父」
「御親父」、「師父」、「尊父」、「父君」…… 8 語

(4) 息子に関する語 —— 「愚息」、「太郎」、「長子」、「ジュニア」
「二世」…… 5 語

(5) 兄に関する語 —— 「家兄」、「貴兄」、「義兄」、「愚兄」、「賢兄」
「次兄」、「舍兄」、「尊兄」、「仲兄」、「老兄」、「大兄」… 11 語

(6) 弟に関する語 —— 「舍弟」、「小弟」、「末弟」…… 3 語

以上に記した対応関係のない各語がその属する性の語としての特色を表わすことになる。(1)の母に関する語については、この9語をさらに機能、語義の面から分けてみると、

(1)-a 母を限定、修飾するもの —— 「賢母」、「聖母」、「生母」
「母后」、「悲母」

(1)-b 待遇表現に関するもの —— 「母上」、「母御」、「母者人」
「母堂」

となる。父に関する語も同じように分けてみると次のようになる。

(3)-a 父を限定、修飾するもの —— 「雷おやじ」、「嚴父」

(3)-b 待遇表現に関するもの —— 「嚴君」、「御親父」、「尊父」
「^{ふくん}父君」

(3)-c 父と他者をあわせて表わすもの —— 「君父」、「師父」

ここで、(1)-aと(3)-a、(1)-bと(3)-bを比べてみることにする。

(1)-aの各語をみると、「生母」は、女性特有の語であり、「聖母」も宗教的に限定された女性を指していて、女性の側に固有の語である。「賢母」は、「賢」や「愚」は両性のどちらにもある属性であって「賢父」と対応するはずだが、ここに「賢父」という語はない。(ここで「ない」というのは『岩国』から採取した語の中にない、つまり『岩国』に採録されていない、ということで、語そのものが存在しないということではない。因みに、「賢父」は『大漢和辞典』(諸橋徹次著、以下『大漢和』と略記する)『小日国』には採録されている)。「賢兄」、「賢弟」、「賢母」があって「賢父」がないのはなぜだろうか。「賢兄」などは「愚兄賢弟」、「賢兄愚弟」、「良妻賢母」のように成語として使われることも多いが、「賢父」にはそのような使われ方がないからであろうか。当辞典の編集方針として「現代生活に必要なものという観点」が掲げられているが、現代生活に「賢母」の語の方が「賢父」の語より必要だとする編集者の判断が働いていたのかもしれない。

次に「母后」は「天子の母」の語釈がつけられている語であるが、これに相当する父側の語はない。「天子の母」を問題にすることに比べて「天子の父」を云々することは少ないということであろうか。

「慈母」は「慈悲ぶかい母。慈母。『一観音』」と語釈がなされている。「慈母」と同義語と見ていいと思われる。「慈母」に対応する語として「慈父」があることから、父側にも同じ内容の語はあるが、「慈母観音」のような使われ方をするものは父側にはないということである。

(3)-aは、「雷おやじ」、「嚴父」の2語であるが、これに相当する母側の語はない。「雷おやじ」は「何かにつけてすぐどなりつける習慣のある父親」と語釈がつけられており、「すぐどなりつける」のが父親の特性の1つであったことになる。「嚴父」に対応するものとしての「嚴母」は『岩国』にはない(『小日国』にはないが『大漢和』には収められている)。

次に、(1)-bと(3)-bを比べてみる。

(1)-bの「母者人」は『岩国』の語釈では「子が母を親しんで言う語」とあり、自分の母と他人の母の区別があるか否か明らかではない。『小日国』でも「子などが母を親愛の情をこめてよぶ語」(下線遠藤、以下同じ)と書かれ、自分の母親に限っていないようにも判断できる。用例もその部分だけ

では、子が自分の母に呼びかけているかどうか分からない。しかし『新明解』では「昔、自分の母親を子が親しんで言った言葉」と記されている。

「母上」は『岩国』に「母を敬って言う語」と語釈がなされている。これも自分の母か他人の母か、区別があるのかないか明記されていない。『小日国』の用例でみる限りでは、自分の母も他人の母も一般的に母親の敬称として使えるものとみられる。

「母御」は『岩国』では「母上」と全く同じ語釈で「母を敬って言う語」と記され、その下に「母御前」と加えられている。『新明解』には「相手の母の敬称」と明記されている。『小日国』の用例では相手の母親を指して「そなたのははごの悲しむも」の例と、「敏君の母御を呼むで」と相手か第三者か分からない人物の母親に対する敬語としての例が載せられている。

「母堂」は『岩国』にも「他人の母の敬称」と記されている。

これらを整理すると母側の待遇表現に関する語は「母者人」が主に自分の母、「母上」が自分、他人両方の母、「母御」、「母堂」が自分以外の母、と表わす対象がそれぞれ異なっていることがわかる（その相違が『岩国』には明確にされていないが）。

一方、父側の「御親父」、「^{ふくん}厳君」、「尊父」、「父君」はいずれも他人の父を敬う際に用いられるだけで、自分の父に対しては使うことができない。

このように父側の語と母側の語とで敬う対象が異なることから、対応関係が生じなかったのである。「母御」、「母堂」に対して「父御」、「父堂」の語が考えられるが、『岩国』にはない。（「父御」は『小日国』、『大漢和』、『旺文社』、『新明解』、『新潮』、『三省堂』には採録されている。「父堂」はこれらにはみられない）。

「父上」、「父者人」も『岩国』には採録されていないが、他の辞書では収録しているものもある（「父上」は『小日国』、『旺文社』、『新潮』、『新明解』、『三省堂』に採録されており、「父者人」は『小日国』、『新潮』にみられる）。

このような語については、語そのものは存在していても辞書によって採否が異なるわけで、そこには編集者の方針、意図、姿勢といったものの相違が表われてくる。

(3)-Cについてみると、「君父」は「君主と父」、「師父」は「師と父」

のように2者を合わせて1語になった語であるが、母側にはこの種のものはない。

次に、(2)の娘に関する語について考えてみたい。「孫娘」に対応する語として「孫息子」というのが考えられるが、そのような語はない。「孫」は男女両性を含む語であるが、かつて、「孫」は男の孫を指す語であって、それと区別するため女の孫の場合「孫娘」という必要ができたということであろうか(『小日国』にひかれている用例では男の孫を示している)。それとも、祖父母からみて、男の孫より女の孫の方が愛着を抱かせ、関心の的になる度合いが強かったから、この語が生まれたということであろうか。

「愛娘」にも「愛息子」という対応する語はない。「愛嬢」には「愛息」^{まなむすめ} ^{まなむすこ} に対応しているが、「愛娘」^{まなむすめ} ^{まなむすこ} に相当する男性側の語はないのである。

「愛嬢」、「愛息」にも「愛娘」と同じような、「かわいがっている娘、息子」という語釈はつけられているが、こちらは漢語であり、固さと儀礼的な意味が含まれるのに対して「愛嬢」には和語のもつ柔らかさと温かきがある。どちらかといえば「愛嬢」は他人の場合に使われ、「愛娘」は自分の娘の場合に使われると思う。「愛息子」という語が生まれなかった理由は、自分の娘に対してほどは息子に対して柔い温い感じを抱くことが少ないからということであろうか。あるいは、自分の息子を柔い温い愛情の対象として対外的に表現することは、娘の場合ほど多くはないからということであろうか。さらにおし進めると、剛健な武士を育むことが目標である武家社会で、息子に甘い温い感情を抱くことは許されなかった、まして対外的にそれを表明することはありえなかったからということも考えられる。

次に(4)の息子に関する語をみることにする。(4)に記した5語は「愚息」と「長子」、「太郎」以下4語の2つのグループにわかれる。前者は息子の属性を表わすものであり、後者は息子の家の中での位置づけを表わすものである。

「愚息」についてみると、これに対応するものとして「愚娘」があってもよいはずだがそれはない。「愚妹」、「愚母」はあるのだが娘の場合はない。『小日国』の「愚女」の項目をみると「①愚かな女②自分の娘をへりくだっている語」とある。「愚息」に対応する語は「愚女」ということになるが、この語も『岩国』にはない。

「長子」、「太郎」、「ジュニア」、「二世」は家の中での息子の位置づけを表わし、親の名をうけつぐ者であることを示す家父長制の長子相続の伝統から生まれた語である。

家父長制のもとでは、男であること、しかも第1子であることは、それ以外の子供より一段と高く位置づけられた。そのため「長子」、「太郎」のような語が生まれたのだが、娘の場合、出生の順位は男子ほど重要ではなかったから、これに相当する語が生まれなかったのである（「長女」はあるが、これは「長男」と対応する語として処理しているのでここではとりあげない）

「ジュニア」、「二世」は西洋伝来の概念だが西洋でも、男性を意味する語である。「二世」には「エリザベス二世」のように女性の場合もあるが、これは君主として特別の場合で、普通は「ケネディ二世」のように男性である。しかし、「ジュニア」、「二世」は男性ではあるが、第1子と限定されていない点が「太郎」、「長子」とは異なっている。

次に、(5)の兄に関する語をみることにする。男性の側にだけあって、女性側の語と対応関係をもたなかった語が、ここには多い。

これも上に述べたように、男性の側では兄であるか弟であるかは非常に大きな相違であるが、女性側では姉であるか妹であるかはあまり問題とされなかったことの表われである。「長兄」、「次兄」、「仲兄」のように順位を表わす語も男性側にはあるが、女性側には「長姉」しかない。

「賢兄」、「愚兄」はあるが「賢姉」、「愚姉」はない。（『大漢和』、『小日国』に「愚姉」はある）

兄に関する語には「貴兄」、「大兄」など、実際の血縁関係にない年上の男性を表わす語も多い。「諸兄」に対して「諸姉」と姉の語を用いて年上の女性を表わす語は1語あったが、「貴兄」、「大兄」、「老兄」、「尊兄」に対応する姉側の語はない（「大姉」はあるが、これは「大兄」の対応ではなく、死者に付するものである）。これも対外的に女性が進出する場面が少なかった社会を反映しているのであろう。血縁、親族関係以外に女性が他の年上の女性と姉と呼べるほど親密な関係をもつということは、男性に比してはるかに稀であった、ということが、この種の語の少なさにも表われているのである。

(6)の弟に関する語には、「舎弟」、「末弟」の2語がある。「末弟」は男

子の中での順位が問題であったところから生まれた語であろうが、女子の場合、先に述べた通り、順位は問題にされなかったから「末妹」という語は必要がなかったのであろう。

「舎弟」は「自分の弟のことを他人に対して言う語」と語釈がつけられているが、「舎妹」がないということは「自分の妹のことを他人に対して言う」ことが弟に比して少なかったというのであろうか。妹のことは弟ほど対外的に話題にならない、話題にしないということなのであろうか。

以上、女性側の語と男性側の語で対応関係をもたないものから、それぞれの性を表わす語の特徴をみた。対応関係をもたないものの中には、語そのものが存在しない場合と『岩国』では採録されていないから対応関係として消去できずに残ったものがあった。前者の場合なぜ一方の性を表わす語があって、他方の性を表わす語がないのか、その理由がわかれば女性なり男性なりの位置づけが言葉の上から明らかになると思われるが、その理由は推論の域を出ないものが多い。ここでは今後の判断の手がかりとして、非存在の事実を示すにとどめたい。

女性側に少なく、男性側の語が多かったということは、とりもなおさず、家父長制の伝統が言葉の上に大きく影をおとしているということであって、このグループの語には、現代社会を反映しているというよりも歴史的、伝統的事実を表わす語が多いともいえるのである。なお「賢」、「愚」のつくこのグループの語についてまとめてみた。〔 〕の語は『岩国』に採録されていないものである。

〔賢父〕—— 賢母

注1

賢兄 ——〔賢姉〕

注2

賢弟 ——〔賢妹〕

愚父 —— 愚母

愚兄 ——〔愚姉〕

注3

愚弟 —— 愚妹

愚息 ——〔愚娘〕

注4

注1. 『大漢和』、『小日国』にはある。

2. 『大漢和』にはある。

3. 『大漢和』、『小日国』にはある。

4. 「愚女」とすれば『小日国』にある。

[表 2]

[B] 姻戚関係を表わす語 (50音順→)

女性を表わす語					
愛妻	相嫁	悪妻	兄嫁	姉女房	一枚かわ
うわなり	奥	奥方	奥様	奥さん	おしかけ 女房
かかあ	家内	かみ様	北の方	愚妻	継妻
荆妻	継室	賢夫人	好述	後妻	小姑
御新さん	御新造	御内方	細君	妻子	妻室
妻妾	山妻	姑	新婦	正妻	正室
世話女房	先妻	嫡	つま 妻	内儀	内室
新妻	後添い	花嫁	人妻 みだい 御台	夫人	フラウ 嫁
ベターハフ	本妻	梵妻	令閨	山の神 令室	令夫人
嫁御	嫁女	良妻			(62語)
簾中	ワイフ				

男性を表わす語					
愛婿	入り婿	内の人	夫	外舅	岳父
サイノロー	舅	主人	女婿	新郎	背の君
先夫	旦那	つま 夫	亭主	二本棒	入夫
ぬし 主	ハズ	[夫]	夫君	婿	婿がね
婿養子	宿	宿六	良人	両夫	令婿
					(30語)

〔表 3〕

	女 性 側	男 性 側
(1) 配偶者自身を表わす語	「妻」「ワイフ」など 8語	「夫」「主」など 9語
(2) (1)の状態を表わす語	「愛妻」「世話女房」など 13語	「サイノロジー」「二本棒」 2語
(3) だれかの配偶者であることを表わす語	「兄嫁」「令閨」など 22語	「婿」「内の人」など 7語
(4) (3)の状態を表わす語	「賢夫人」 1語	「愛婿」 1語
(5) 配偶者としてのあり方なり方を表わす語	「おしかけ女房」「後妻」 など 14語	「入り婿」「婿養子」など 6語
(6) 配偶者と他者を合わせた語	「妻子」「妻妾」 2語	0語

[B] 姻戚関係を表わすもの [表2]

ここでは、女性側の語が62語、男性側の語30語で、[A]のグループとは反対に、女性側の語が男性側の2倍以上にもなっている。

女性側の語では「小姑」、「姑」以外の61語は全て妻であることを表わす語である。男性側では「外舅」、「岳父」、「舅」以外の26語が夫を表わしている。

そこで、妻・夫を表わす語をその意味上の違いをもとにいくつかに分けて考えることにした。[表3]

(1)の配偶者自身を表わす語は、女性側8語、男性側9語で、そのバラエティーにおいて大差はない。質的にみると、女性側には「かかあ」、「山の神」のような俗語、揶揄的な表現の語があるが、男性側にはこの種の語はない。外来語の「ワイフ」に対して「ハズ」はあるが（「ハズバンド」はない）、ドイツ語からの「フラウ」に対するものは男性側にはない。

(1)では配偶者その人を表わす語であったのに対し、(2)にはそれらの配偶者の状態を表わす語をまとめたが、ここでは女性側13語に対し男性側は2語にすぎない。男性側の「サイノロジー」は「妻に甘い態度で、その言いなりになる人」と語釈がなされ、あとの1語の「二本棒」も「妻に甘い夫」の語釈がついているが、これによると、毅然とした夫ではないが、そのことが決定的にマイナスになるほど悪い評価を意味する語ではないことになる。

これに対して女性側にはプラスの評価かマイナスの評価かがはっきりしている語が多い（ここでプラス、マイナスと述べているのはその語本来の意味に含まれているもので、使用者の意図とは関係がない）。

(2)-a プラス評価の語——「愛妻」、「良妻」、「好述」、「ベター
ハーフ」

(2)-b マイナス評価の語——「悪妻」、「愚妻」、「山妻」

これらの評価を下しているのは夫であるか、夫自身でないにしても夫の側からみての「良妻」か「悪妻」かの判断である。一方このように妻から夫をみて夫を評価した語は全然ない。先の「サイノロジー」にしても「二本棒」にしても、妻が自分の夫のことをこのようなことばで呼ぶはずはなく、これらは当該夫婦の夫を、外部の人間が、それもおそらくは男性が評して語る場合に使われる語である。

(2)に属する語が女性側のものが圧倒的に多かった理由は、夫が妻を評価して述べる語は多いが、妻が夫を評価した語が全くないことによるものとみていいだろう。

(3)として、だれかの配偶者であることを表わす語を集めたが、だれかの配偶者といえ(1)もだれかの配偶者であることに違いないということになる。しかしここでは「兄嫁」のようにだれかの嫁である。そのだれかに重点をおいたものを集めた。(1)ではだれかの妻であり、夫であることは問題ではなかった。ここではだれかの配偶者であるから、当然待遇表現との関係も強くなる。そのようなものもここに集めた。

ここでも女性側 2 語に対して男性側 7 語と男性側は女性側の $\frac{1}{3}$ にも満たない。

男性側に多いのが「婿」に関するもので「女婿」、「婿」、「令婿」3語がここに属している。男性の場合、だれかの配偶者であることを示す必要はあまりないが、もしあるとすればそれは娘の配偶者であることを明らかにしたい場合だ、ということになるろうか。

女性の場合は「兄嫁」、「北の方」、「御新造」など、だれかの配偶者であることを指す語が多い。これは女性はだれかの配偶者という存在として位置づけられることが多い、ということのことば側からの裏づけである。この点に関して、井出祥子氏が「女が新聞ダネになるとき、結婚している女の場合、夫の職業、夫の姓名と年齢が紹介され、その妻〇〇歳というように書かれることが多い。(中略)被害にあった女性は、賊に襲われたということが夫とまったく関係のないところで起きて、『会社員山田ひろしさんの妻よう子さん』というように、夫の職業や肩書を通して社会に位置づけられる」と述べておられるが、氏の現代社会での位置づけと、小論でことばの表われ方(注1)の面から考察した位置づけと一致すると思う。

待遇表現として、女性側には「奥様」、「御内方」、「令閨」などバラエティーに富んだものがあるが、男性側には「背の君」1語しかない。このことも上に述べたことと軌を一にしていると考えられる。A氏の配偶者であるB子さんは、対外的にはB子さん自身の存在を位置づけられるというよりA氏の「令夫人」として位置づけられることが多く、その待遇の表わし方がA氏の「奥さん」であったり「奥様」であったり「御令室」であるというよう

に場面により位置づけにより変わるということである。

一方、男性の場合は、女性のB子さんの配偶者とみる必要はほとんどなく、A氏それ自身として存在が認められる。したがって、男性を表わす語が女性の側に比べて極端に少ないのである。

(4)は女性側に「賢夫人」、男性側に「愛婿」と1語ずつである。どちらもプラス評価をもつ語で、女性と男性のことばの表われ方に差はない。自分の配偶者ではなく、だれかの配偶者を述べた語であるから語数も多くはなく、質的にも差はみられない。

(5)は、(2)、(3)と同じく女性側の語が男性側の語の2倍以上になっている。「おしかけ女房」、「継妻」、「後添い」など、配偶者になる経緯、過程を表わす語であるが、結婚が両性の対等の立場でなされるのではなく、男性の家へ女性が入る、という形で行なわれてきた室町時代以降の歴史的背景をみるなら、その女性の配偶者へのなり方を表わす語が男性に比して多いのは当然(注2)ということになる。男性の場合「入り婿」、「順養子」と特殊な場合の語しかないのも、本来女性が男性の家に入るもので、男性が女性の家に入る事実が少なく、したがってその入り方も問われることがなく、それを表わすことばも少ない、という結果になっているのである。

以上姻戚関係を表わす語の女性と男性の語の特徴をみてきたが、総数での女性側62語、男性側30語という数の差は、①男性の側から女性をみる語が多いこと、②男性中心社会の反映として、女性側の語に、だれかの配偶者であること、またその配偶者への過程などを示す語が多いが、男性側にこの種の語は極めて少ないこと、の2つの理由によって生じたものであり、それがまた質的な相違ともなっていることがわかる。

注1 『女のことば、男のことば』(日本経済通信社 1979)

注2 『高群逸枝全集、日本婚姻史』(理論社 1971)

〔表 4〕

〔C〕 地位、身分、職業を表わす語

(50音順→)

女性を表わす語					
遊 び	遊 び 女	尼	海 女	アルト	糸 姫
淫 売	淫 婦	浮かれ女	歌 い 女	乳 母	裏 方
おいらん	王 女	皇 女	王 妃	大 内	O L
大政所	お か み	おさんどん	お 酌	お 末	お乳の人
お茶子	お茶ひき	お 次	男 役	乙 姫	踊り子
大原女	女 形	織 姫	おんば 乳 母	街 娼	抱 え
花 車	家 婢	上女中	看 護 婦	官 女	キーサン
后	妓 女	きれいろ きどこ	クイーン	くぐつ	玄 人
芸 妓	傾 国	芸 者	傾 城	下 女	後 宮
紅 裾	皇 后	公 娼	皇 太后	腰 元	警 女
御殿女中	小 走 り	小 間 使	御 寮 人	齋 院	齋 宮
早乙女	三 后	産 婆	式 部	侍 女	私 娼
シスター	下 女 中	下 仕 え	酌 婦	修 女	主 婦
女 医	娼 妓	尚 侍	商 売 人	娼 婦	上 藤
女 王	女 官	女 給	職 業 婦 人	女 工	助 産 婦
女 将	女 中	女 帝	女 優	女 郎	白 拍 子
炊 婦	スチ ュー デス	ソプラノ	それしゅ	たま 玉	太 夫
だるま	中 官	中 藤	辻 君	つぼね	典 侍
内 侍	内 親 王	仲 居	中 働 き	泣 き 女	尼 僧
女 院	女 御	にょ 女 帝	奴 婢	ば い 女	売 人
ハ ウ ス キ ー パ ー	端 女	派 出 婦	針 子	バレリーナ	パンパン
妃	婢	B G	曳 舟	一 夜 妻	姫 御 前

ぶ舞	ぎ妓	巫女	婦長	プリンセス	プリマドンナ	舞子
舞姫	待女	女郎	政所	みこ	みずてん	命婦
名妓	メード	盛り	飯盛り	乳人	めろ	遊君
遊女	ゆな	鷹	夜鷹	寮母	女郎	老婢
	湯女				老妓	
						(156語)

男性を表わす語						
王子	皇子	おすきや 坊主	落武者	女形	折助	
カウボーイ	陰間	千城	騎士	棋士	妓夫	
義僕	旧臣	驍将	漁父	キング	公達	
公卿	国侍	君公	君主	君臣	君王	
軍夫	下男	下僕	家来	下郎	賢君	
剣士	皇嗣	皇太子	国老	権助	権蔵	
作男	三助	さんびん	師父	侍従	しもとお 下男	
諸王	人君	臣子	親王	炊夫	太子	
立女	男工	男爵	男娼	男優	茶坊主	
中間	出方	テナー	天皇	東宮	殿	
殿様	どぼく 奴僕	ナイト	ぬぼく 奴僕	箱屋	プリンス	
坊主	味すり 坊主	浪士	浪人	老兵	老僕	
若君	若様	若党	若殿	若官	若旦那	
						(78語)

[C] 地位、身分、職業を表わす語 [表4]

このグループに入れた語の中には、「皇嗣」、「后」など、それぞれ[A]の血縁関係、[B]の姻戚関係のグループに属するとも思われる語があるが、その語のもつ意味の重点が、特殊な身分、地位を表わすことにかかっていると考えたものは、[C]にした。

ここでも比較検討しやすいように、[表4]の語をさらに分類してみた。地位と身分、身分と職業など画然と線が引けない語が多いが、ここでは地位身分は区別せず、それら(1)と、労働力を提供し代価を得る経済関係にあるもの(2)とを区別した。さらに(2)を一般的職業(2)-aと、肉体関係を含む異性間のサービスを中心とする職業(2)-bとに分けた。(2)をこのように分けたのは、「遊女」、「娼妓」、「芸者」等男性へのサービスに関する職業のことばが非常に多いことと、それらのことばが、女性の地位を知る手がかりとなるだろうと考えたからである。

以上のように分類してまとめたのが[表5]である。総数においては女性側の語156語に対し、男性側は75語で、女性側が2倍以上である。

[表5]

	女 性 側	
(1) 地位、身分を表わす語	「女院」「プリンセス」 など 28語	「公卿」「王子」など 29語
(2) 職業を表わす語		
a 一般的職業を表わす語	「看護婦」「女工」など 78語	「男優」「棋士」など 45語
b 特殊な職業を表わす語	「淫売」「娼婦」など 50語	「陰間」「男娼」 2語

(1)では女性側27語に対し、男性側31語と男性側の方が多くなっている。
[A]で行なったように対応関係のあるものを消去して残ったものを調べると、男性側に「君主」、「君王」、「賢君」、「天皇」（古くは女帝の推古天皇のような例もあるが、ここでは「男系の男子がこれを継承する」という現行の皇室典範の規定による）といった君主を表わす語があり、これらの語の存在が、女性側との差を生んでいることがわかる。

(2)-aでは、女性側78語に対し男性側は45語と、女性側の方が1.7倍になっている。

ここに出てくる女性側の語は「看護婦」、「派出婦」など女性固有の職業を表わすものと、「女医」、「職業婦人」など、その職業との関わり方が女性であるから特殊扱いされることを表わす語に大別される。

前者の場合「バレリーナ」「プリマドンナ」など女性の側の語のみあって、これに対応する男性の側のことばはない。

後者の場合、「医者」にしても「職業人」にしても、もともとは男性の側に属するとされたことばであり、実社会でも男性の方が圧倒的に多いのだが男性側のことばとしてはとりあげられない。女性側のことばがあるということは、その女性の存在が例外的なもの、特殊なもの、あとから加わったものということを示している。本来男性固有の職業を表わした語も、女性の進出によって男性固有のものでなくなったため、本研究の対象としなかったもの（たとえば「警察官」は現在では男性固有の職業ではないから、ここで取り上げていないが「婦人警官」という語があれば、それは女性の側の語として取り上げる）、また実態としては男性のみに就いている職業でも辞書に男性と規定されていない場合（たとえば「板前」の語釈には「日本料理の料理人」とのみ記され、男性云々の規定がないから取り上げていないが、実態上は男性の職業といえる）もこの表には上ってこないことなどから、ことばの数と社会の実情とは一致なくなっている。

女性側の語が多いということは、実情とは逆に、女性は本来の男性の職業の一部に席をおいているにすぎない、だから、ことばも特別なものがある、ということなのである。井手氏も前掲書で「……男が主役、女が脇役である世の中では、そのありさまがことばに如実に表われている。『店の主人』、『社長』、『医者』ということばでだれもが思いうかべるイメージは男であろう。『店の女主人』、『女社長』、『女医』ということばがあることは、『主』や『長』になる者や、医者という社会的地位の高い者は男子であり、女がそうなることは特別のことと考える社会通念が表われている」と述べておられる。

(2)-bに属するものは、男性側は2語しかないのに対して、女性側は50語にもぼっている。「遊び女」から「淫売」、「おいらん」、「妓女」、

「傾国」、^{じよろ}「私娼」、^{めろう}「女郎」、^{ばいた}「だるま」、^{ばいた}「辻君」、^{ばいた}「売女」
 「夜鷹」に至るまで同じような語を実に 50 語も採録されている。

いかに女性が男性にサービスする存在であったか、このことばの群をみると一目瞭然である。サービスの程度や、社会的位置づけ、相手とする男性の階層の違いなどによってことばも多岐に派生してきたものであろうが、本質においてかわりはない。

それらの存在が歴史的事実であったとしても、「現代生活に必要なものを採録する」ことを編集方針とした『岩国』がこれほど詳細にこの種の語を採録したのはどういう意図であろうか。これらの語が現在でも生きており、現代生活に必要なものと考えられたのであろうか。

辞書のもつ規範性と公共性、影響力などを考えるとき、以上の『岩国』の採録のしかたには疑問を抱かずにはいられない。

[表6] [D] 状態、属性を表わす語 (50音順→)

女性を表わす語					
悪女	足弱	あばずれ	色女	うえ上	乳母
うまずめ					
石女	売れ残り	媼	オールドミス	おかめ	おきゃん
	おとこおんな				
お転婆	男女	男嫌い	男狂い	男腹	男勝り
鬼婆	おはね	お引きり	女腹	佳人	看板娘
悍婦	貴婦人	生娘	狂女	グラマー	経産婦
閨秀	賢女	賢婦人	子(若い娘)	紅一点	孝女
こおんな					
小女	後家	コケツト	小町	小娘	子持ち
才媛	才女	細腰	産婦	じゃじゃま	シャン
醜女	醜婦	淑女	女傑	女囚	処女
女丈夫	白歯	素人	ステッキガール	ずべ	青踏
聖女	節婦	善女	たおやめ	畜生腹	沈魚落雁
ちんくしゃ	貞女	貞婦	手入らず	出戻り	毒婦
刀自	年増	妊産婦	妊婦	莫連	箱入り娘
蓮葉	跳ね返り	パンブ	美女	美人	ヒロイン

醜女	ぶす	フラッパー	ブルネット	ブロンド	別嬪
ホステス	未亡人	名花	明眸	明眸皓齒	やさおんな 優女
大和撫子	やもめ	行き戻り	妖女	裸婦	レディー
麗人	烈女	烈婦	老嫗	老女	老嬢
老婆	ワソール				(110語)

男性を表わす語					
青二才	東男	兄弟子	色男	翁	弟弟子
男一匹	おとこおんな 男 女	男伊達	男やもめ	女嫌い	女殺し
女たらし	快男児	奸臣	奸雄	きかんぼう	貴君
貴公	貴公子	奇士	義士	貴所	貴僧
貴殿	貴方	君	逆臣	逆賊	俠客
凶漢	巨漢	愚僧	愚禿	雲助	狛下
傑士	剣豪	健児	好好爺	好男子	小悴
小坊主	ごまの灰	三太郎	色魔	俊秀	上士
小生	神君	丈夫	仁君	紳士	進士
酔漢	ゼント マ	尊台	尊公	大兄	大丈夫
乃夫	儒夫	男囚	ダンディー	痴漢	稚児
忠士	チョンガー	つわもの	出齒亀	童貞	年男
殿方	殿御	殿原	どら息子	ドンファン	二枚目
ハンサム	万夫	ヒーロー	鼻下長	美童	美男
ひょっとこ	風雲児	夫子	醜男	暴漢	坊や
僕	ホスト	木強漢	凡夫	ますらお	やさ 優男
山男	やもめ	与太	与太者	与太郎	両雄
烈士	老翁	老生	老台	老爺	老雄
若い衆	若衆	若殿原	わっぱ		(112語)

[D] 状態、属性を表わす語 [表6]

ここに集めた語は女性側は110語、男性側は112語と、数においてはほとんど変わらない。その具体的な個々の語の表われ方については、それらの表わす状態が、肉体的なものか、年齢的なものか、内面的なものかなどいくつかに分けて考えることにした。[表7]

(1)の年齢的条件、状態を表わす語としては、中間、標準、一般的とされる年齢より高いか低いかを示す語が多い。

女性側で、若い方を表わす語は「小娘」、「子(若い娘の意)」の2語で、年齢の高い方を示す語は「媼」、「年増」など9語である。

男性側では「青二才」、「坊や」など若い方は9語で、「翁」、「老爺」など年をとっている方が5語である。

これらのもつ語のイメージがことば本来の意味ではなく、うけとめ方においてプラス評価になるかマイナス評価になるか、110名の男女を対象にイメージ調査を行なった結果とあわせてみていくことにする。女性側、男性側のどちらにプラスイメージの語が多いか、マイナスイメージの語が多いかを知るためである。

[表7]

	女 性 側	男 性 側
(1) 年齢的条件、状態を表わす語	「媼」「老嬢」など 11語	「青二才」「老翁」など 15語
(2) 肉体的条件、状態を表わす語	「おかめ」「産婦」など 26語	「ハンサム」「ひょっこ」など 11語
(3) 素質、能力、才能などを表わす語	「才媛」「女傑」など 9語	「快男児」「傑士」など 8語
(4) 対異性関係の状態を表わす語	「男狂い」「処女」など 14語	「女たらし」「色魔」など 9語
(5) 行動、動作の状態を表わす語	「あばずれ」「跳ねっ返り」など 28語	「奸臣」「酔漢」など 29語
(6) おかれた状態を表わす語	「紅一点」「行き戻り」など 15語	「男やもめ」「チョンガー」など 9語
(7) 待遇関係を表わす語	0語	「貴殿」「愚僧」など 22語
(8) 身分を表わす語	「貴婦人」「刀自」など 6語	「貴公子」「仁君」など 8語
(9) 複数の人物を表わす語	0語	「万夫」「両雄」 2語

この調査では〔表7〕の語全てにわたって、「プラスのイメージをもつ(+)」か「マイナスのイメージをもつ(-)」か「どちらでもない(O)」か「その語がわからない」かの4種の区別を対象者につけてもらって、それを集計した。ここでは調査対象者の全体の60%以上がプラスとしたものをプラス評価、60%以上がマイナスとしたものをマイナス評価の語とした。

〔表8-1〕女性を表わす語の中のプラス評価の語 17語

(110語中)

		+	-	O	B			+	-	O	B
		%	%	%	%			%	%	%	%
看板娘	全体	76.4	4.5	13.6	5.4	美女	全体	79.1	3.6	15.4	1.8
	男	76.4	7.3	10.9	5.4		男	80.0	1.8	16.4	1.8
	女	76.4	1.8	16.4	5.4		女	78.2	5.4	14.5	1.8
貴婦人	全体	81.8	7.2	10.0	0.9	美人	全体	84.5	2.7	12.7	0
	男	74.5	12.7	12.7	0		男	83.6	1.8	14.5	0
	女	89.1	1.8	7.3	1.8		女	85.5	3.6	10.9	0
賢女	全体	73.6	6.3	12.7	7.2	ヒロイン	全体	81.8	3.6	12.7	1.8
	男	70.9	5.4	18.2	5.4		男	81.8	3.6	10.9	3.6
	女	76.4	7.3	7.3	9.1		女	81.8	3.6	14.5	0
賢婦人	全体	68.2	7.2	15.4	9.1	ブロンド	全体	63.6	6.3	26.4	3.6
	男	63.6	7.3	18.2	0		男	56.4	7.3	32.7	3.6
	女	72.7	7.3	12.7	7.3		女	70.9	5.4	20.0	3.6
紅一点	全体	68.2	2.7	24.5	4.5	別嬪	全体	73.6	11.8	10.9	3.6
	男	67.3	3.6	29.1	0		男	78.2	10.9	9.1	1.8
	女	69.1	1.8	20.0	9.1		女	69.1	12.7	12.7	3.6
小町	全体	76.3	4.5	16.3	2.7	大和撫子	全体	77.2	6.3	13.6	2.7
	男	74.5	7.3	14.5	3.6		男	72.7	5.4	18.2	3.6
	女	78.2	1.8	18.2	1.8		女	81.8	7.3	9.1	1.8
才女	全体	81.8	8.1	10.0	0	麗人	全体	70.0	12.7	12.7	14.5
	男	78.2	10.9	10.9	0		男	67.3	3.6	14.5	14.5
	女	85.5	5.4	9.1	0		女	72.7	1.8	10.9	14.5
淑女	全体	74.5	4.5	14.5	6.3	レディー	全体	79.1	2.7	16.3	1.8
	男	74.5	3.6	14.5	7.3		男	74.5	5.4	18.2	1.8
	女	74.5	5.4	14.5	5.4		女	83.6	0	14.5	1.8
聖女	全体	71.8	5.4	19.1	3.6						
	男	69.1	7.3	20.0	3.6						
	女	74.5	3.6	18.2	3.6						

[表 8-2] 男性を表わす語の中のプラス評価の語 20語

(112語中)

		+	-	O	B			+	-	O	B
		%	%	%	%			%	%	%	%
翁	全体	60.9	6.4	30.0	2.7	健児	全体	87.3	2.7	9.1	0.9
	男	60.0	3.6	32.7	3.6		男	89.1	3.6	5.4	1.8
	女	61.8	9.1	27.3	1.8		女	85.5	1.8	12.7	0
男一匹	全体	68.2	8.2	22.7	0.9	好男子	全体	70.9	9.1	16.3	3.6
	男	67.3	12.7	20.0	0		男	70.9	9.1	16.4	3.6
	女	69.1	3.6	25.5	1.8		女	70.9	9.1	16.4	3.6
男伊達	全体	62.7	12.7	20.0	4.5	神君	全体	60.0	10.0	23.6	6.3
	男	65.5	20.0	10.9	3.6		男	56.4	14.5	21.8	7.3
	女	60.0	5.4	29.1	5.4		女	63.6	5.4	25.5	5.4
快男児	全体	66.4	10.9	19.1	3.6	紳士	全体	80.9	1.8	16.3	0.9
	男	67.3	10.9	18.2	3.6		男	81.8	1.8	14.5	1.8
	女	65.5	10.9	20.0	3.6		女	80.0	1.8	18.2	0
貴君	全体	61.8	4.5	30.0	3.6	ゼントルマン	全体	67.3	10.9	19.1	2.7
	男	72.7	7.3	18.2	1.8		男	69.1	9.1	18.2	3.6
	女	50.1	1.8	41.8	5.4		女	65.5	12.7	20.0	1.8
貴公	全体	61.8	6.4	30.9	0.9	大丈夫	全体	67.3	2.7	25.5	4.5
	男	61.8	10.9	27.3	0		男	63.6	5.4	25.5	5.4
	女	61.8	1.8	34.5	1.8		女	70.9	0	25.5	3.6
貴公子	全体	80.9	7.3	11.8	0	ダンディー	全体	76.3	8.1	13.6	1.8
	男	81.8	5.4	12.7	0		男	72.7	9.1	16.4	1.8
	女	80.0	9.1	10.9	0		女	80.0	7.3	10.9	1.8
貴殿	全体	60.9	6.4	31.8	0.9	2枚目	全体	74.5	9.1	15.4	0.9
	男	62.6	5.4	30.9	0		男	74.5	14.5	9.1	1.8
	女	58.2	7.3	32.7	1.8		女	74.5	3.6	21.8	0
傑士	全体	60.0	1.8	20.9	17.2	ヒーロー	全体	82.7	6.3	10.0	0.9
	男	61.8	3.6	18.2	16.4		男	85.5	9.1	3.6	1.8
	女	58.2	0	23.6	18.2		女	80.0	3.6	16.4	0
剣豪	全体	85.5	0.9	9.1	4.5	美男	全体	60.9	13.6	23.6	1.8
	男	85.5	0	10.9	3.6		男	60.0	12.7	23.6	3.6
	女	85.5	1.8	7.3	5.4		女	61.8	14.5	23.6	0

[表 8 - 3] 女性を表わす語の中のマイナス評価の語

29語
(110語中)

		-	+	O	B			-	+	O	B
		%	%	%	%			%	%	%	%
悪女	全体	61.8	22.7	14.5	0.9	醜婦	全体	86.4	0	3.6	10.0
	男	56.4	25.5	16.4	1.8		男	87.3	0	1.8	10.9
	女	67.3	20.0	12.7	0		女	85.5	0	5.4	9.1
足弱	全体	61.8	0	14.5	23.6	女囚	全体	75.4	2.7	14.5	7.2
	男	69.1	0	12.7	18.2		男	76.4	1.8	18.2	3.6
	女	54.5	0	16.4	29.1		女	74.5	3.6	10.9	10.9
あばずれ	全体	89.1	5.4	2.7	2.7	ずべ	全体	92.7	0.9	0.9	5.4
	男	90.9	3.6	1.8	3.6		男	90.9	1.8	0	7.3
	女	87.3	7.3	3.6	1.8		女	94.5	0	1.8	3.6
色女	全体	78.2	14.5	5.4	1.8	畜生腹	全体	73.6	2.7	12.7	10.9
	男	78.2	12.7	7.3	1.8		男	69.1	3.6	16.4	10.9
	女	78.2	16.4	3.6	1.8		女	78.2	1.8	9.1	10.9
石女	全体	63.6	0.9	5.4	30.0	ちんくしゃ	全体	64.5	4.5	11.8	19.1
	男	56.4	1.8	9.1	32.7		男	63.6	3.6	12.7	20.0
	女	70.9	0	1.8	27.3		女	65.5	5.4	10.9	18.2
売れ残り	全体	93.6	3.6	2.7	0	出戻り	全体	86.4	3.6	3.6	6.3
	男	94.5	5.4	0	0		男	80.0	3.6	7.3	9.1
	女	92.7	1.8	5.4	0		女	92.7	3.6	0	3.6
オールドミス	全体	87.3	4.5	6.3	1.8	毒婦	全体	83.6	1.8	2.7	11.8
	男	87.3	3.6	7.3	1.8		男	81.8	0	5.4	12.7
	女	87.3	5.4	5.4	1.8		女	85.5	3.6	0	10.9
おかめ	全体	79.1	5.4	15.4	0	年増	全体	85.5	4.5	8.1	1.8
	男	80.0	9.1	10.9	0		男	83.6	3.6	10.9	1.8
	女	78.2	1.8	20.0	0		女	87.3	5.4	5.4	1.8
おこい女	全体	72.7	9.1	16.3	1.8	蓮っ葉	全体	62.7	7.2	11.8	18.1
	男	70.9	7.3	20.0	1.8		男	65.5	5.4	16.4	12.7
	女	74.5	10.9	12.7	1.8		女	60.0	9.1	7.3	23.6
男嫌い	全体	67.3	10.9	21.8	0	おんた女	全体	94.5	0.9	3.6	0.9
	男	63.6	10.9	25.5	0		男	92.7	0	5.4	1.8
	女	70.9	10.9	18.2	0		女	96.4	1.8	1.8	0
男狂い	全体	92.7	2.7	2.7	1.8	ぶす	全体	95.5	1.8	2.7	0
	男	92.7	1.8	3.6	1.8		男	92.7	3.6	3.6	0
	女	92.7	3.6	1.8	1.8		女	98.2	0	1.8	0
鬼婆	全体	85.5	2.7	4.5	7.2	ホステス	全体	73.6	5.4	20.0	0.9
	男	87.3	3.6	3.6	5.4		男	67.3	7.3	23.6	1.8
	女	83.6	1.8	5.4	9.1		女	80.0	3.6	16.4	0
狂女	全体	81.8	5.4	7.2	5.4	やもめ	全体	66.4	4.5	21.8	7.3
	男	87.3	5.4	0	7.3		男	67.3	3.6	21.8	7.3
	女	76.4	5.4	14.5	3.6		女	65.5	5.4	21.8	7.3
後家	全体	63.6	7.2	20.9	8.1	行き戻り	全体	74.5	0	10.0	15.4
	男	63.6	9.1	18.2	9.1		男	69.1	0	16.4	14.5
	女	63.6	5.4	23.6	7.3		女	80.0	0	3.6	16.4
醜女	全体	83.6	4.5	5.4	6.3						
	男	85.5	5.4	5.4	3.6						
	女	81.8	3.6	5.4	9.1						

[表 8-4] 男性を表わす語の中のマイナス評価の語

28語
(112語中)

		-	+	O	B			-	+	O	B
		%	%	%	%			%	%	%	%
青二才	全体	78.2	14.5	6.4	0.9	男 囚	全体	64.5	0.9	10.0	24.5
	男	67.3	25.5	7.3	0		男	63.6	0	10.9	25.5
	女	89.1	3.6	5.4	1.8		女	65.5	1.8	9.1	23.6
おどおどな男	全体	88.2	3.6	8.2	0	痴 漢	全体	97.3	1.8	0.9	0
	男	90.9	3.6	5.4	0		男	96.4	3.6	0	0
	女	85.5	3.6	10.9	0		女	98.2	0	1.8	0
男やもめ	全体	63.6	8.2	26.4	1.8	出 歯 亀	全体	78.2	0	3.6	18.1
	男	63.6	12.7	21.8	1.8		男	85.5	0	3.6	10.9
	女	63.6	3.6	30.9	1.8		女	70.9	0	3.6	25.5
女 嫌 い	全体	60.9	9.1	30.0	0	どら息子	全体	77.2	4.5	15.4	2.7
	男	67.3	5.4	27.3	0		男	83.6	3.6	9.1	3.6
	女	54.5	12.7	32.7	0		女	70.9	5.4	21.8	1.8
女 殺 し	全体	82.7	10.9	5.5	0.9	鼻 下 長	全体	82.7	2.7	2.7	11.8
	男	80.0	12.7	7.3	0		男	85.5	5.4	3.6	5.4
	女	85.5	9.1	3.6	1.8		女	83.6	0	1.8	18.2
女たらし	全体	94.5	1.8	3.6	0	ぶ おどこ 醜 男	全体	77.2	3.6	8.1	1.8
	男	90.9	3.6	5.4	0		男	65.5	1.8	12.7	1.8
	女	98.2	0	1.8	0		女	89.1	5.4	3.6	1.8
逆 賊	全体	61.8	6.4	13.6	18.2	暴 漢	全体	94.5	0	2.7	2.7
	男	67.3	7.3	12.7	12.7		男	94.5	0	3.6	1.8
	女	56.4	5.4	14.5	23.6		女	94.5	0	1.8	3.6
凶 漢	全体	90.0	0	4.5	5.4	ホ ス ト	全体	66.4	10.9	22.7	0
	男	87.3	0	7.3	5.4		男	58.2	16.4	25.5	0
	女	92.7	0	1.8	5.4		女	74.5	5.4	20.0	0
愚 禿	全体	62.7	2.7	5.4	29.1	優 男	全体	63.6	13.6	17.2	5.4
	男	70.9	1.8	7.3	20.0		男	60.0	16.4	18.2	5.4
	女	54.5	3.6	3.6	38.2		女	67.3	10.9	16.4	5.4
雲 助	全体	72.7	1.8	10.0	15.4	や も め	全体	61.8	9.1	27.3	1.8
	男	78.2	0	7.3	14.5		男	63.6	10.9	23.6	1.8
	女	67.3	3.6	12.7	16.4		女	60.0	7.3	30.9	1.8
小 倅	全体	72.7	10.9	10.9	5.4	与 太	全体	70.0	2.7	17.2	10.0
	男	76.4	5.4	10.9	7.3		男	70.9	1.8	20.0	7.3
	女	69.1	16.4	10.9	3.6		女	69.1	3.6	14.5	12.7
小 坊 主	全体	67.3	7.3	25.5	0	与 太 者	全体	84.5	0	6.3	9.1
	男	63.6	10.9	25.5	0		男	81.8	0	9.1	9.1
	女	70.9	3.6	25.5	0		女	87.3	0	3.6	9.1
色 魔	全体	94.5	0.9	2.7	1.8	与 太 郎	全体	66.4	10.9	18.1	4.5
	男	92.7	1.8	3.6	0		男	61.8	10.9	27.3	0
	女	96.4	0	1.8	1.8		女	70.9	10.9	9.1	9.1
酔 漢	全体	80.0	2.7	8.1	9.1	わ っ ぱ	全体	63.6	6.3	19.1	10.9
	男	76.4	1.8	12.7	9.1		男	74.5	5.4	16.4	3.6
	女	83.6	3.6	3.6	9.1		女	52.7	7.3	21.8	18.2

「判断がつかない」とした人が多かった語や「どちらでもない」とした人が多い語では、プラス・マイナスいずれも60%以下となり、それらはここにはとりあげられないことになる。

元にもどって、女性側の若い方の年齢を示す2語についてみると、この2語ともプラス、マイナスいずれも60%には達していない。年輩の方の語では「売れ残り」、「オールドミス」、「年増」、「鬼婆」の4語がマイナス評価で、プラス評価のものはない。

男性側の若い方では、プラス評価のものはなく、マイナス評価のものは「青二才」、「小悴」、「小坊主」の3語である。年輩の方の語では「翁」の1語がプラス評価で、マイナス評価の語はなかった。

年齢的条件、状態を表わす語の傾向として、女性側では標準より年齢の高い方を表わす語の方が、若い方を表わす語より多いが、イメージとしては、年齢の高い方の語にマイナス評価が多い。

男性側は語数では若い方を表わす語の方が多いが、その中にはマイナス評価のものも多い。年輩の方を示す語にはマイナス評価のものはない。

つまりマイナス評価をうける語は、女性側は年齢の高い方で、男性側は年齢の低い方、と男女の対立がはっきりしている。

女性は若い方が価値あるとされ、男性は年をとってからの方が高く評価されるという社会通念が、ことばの評価の上からも裏づけられている。

(2)肉体的状態を表わす語としては、肉体の生理的状态、健康状態、美醜の状態を表わす語を集めた。女性側27語に対し、男性側11語であった。この数の差は、女性側に「産婦」、「男腹」など母性を表わす語が8語あり、男性側にはそれに相当する語がない、容姿の美醜に関する語が女性側に多い、という2つの理由から生じたものである。

容姿の美醜に関する語のイメージとしては、女性側では「小町」、「美女」などプラス評価4語と、「おかめ」「醜婦」などマイナス評価6語、男性側でプラス評価は「ハンサム」、「美男」など4語、マイナス評価は「醜男」^{ぶおとこ}1語となっている。女性側でマイナス評価の語が多く、男性側にプラス評価の語の方が多くなっている。

(3)は素質、能力など表面には表われていない要素を表わす語を集めたものである。女性側では「才媛」、「女傑」など11語、男性側では「俊秀」、

断できないとした人が多かった。「白歯」も40%近くがblankであった。そこで「童貞」、「生娘」、「処女」の3語だけについてイメージの表われ方をみることにする。

[表9]

		+	-	O	B			+	-	O	B
		%	%	%	%			%	%	%	%
節 婦	全体	33.6	14.5	24.5	27.3	生 娘	全体	53.6	20.0	22.7	3.6
	男	34.5	16.4	21.8	27.3		男	45.5	23.6	27.3	3.6
	女	32.7	12.7	27.3	27.3		女	61.8	16.4	18.2	3.6
	男20代	32.5	17.5	17.5	32.5		男20代	45.0	20.0	30.0	5.0
	女20代	27.5	10.0	27.5	35.0		女20代	70.0	12.5	12.5	5.0
貞 女	全体	55.5	10.9	26.4	7.2	処 女	全体	52.7	7.2	39.1	0.9
	男	50.1	12.7	27.3	9.1		男	47.3	9.1	43.6	0
	女	60.0	9.1	25.5	5.4		女	58.2	5.4	34.5	1.8
	男20代	55.0	10.0	25.0	10.0		男20代	50.0	5.0	45.0	0
	女20代	62.5	5.0	25.0	7.5		女20代	67.5	5.0	27.5	0
貞 婦	全体	37.3	20.0	28.2	14.5	白 歯	全体	9.1	30.0	19.1	41.8
	男	34.5	25.5	25.5	14.5		男	5.4	27.3	27.3	40.0
	女	40.0	14.5	30.9	14.5		女	12.7	32.7	10.9	43.6
	男20代	32.5	25.0	25.0	17.5		男20代	2.5	27.5	32.5	37.5
	女20代	35.0	12.5	35.0	17.5		女20代	17.5	32.7	12.5	37.5
童 貞	全体	8.1	37.3	52.7	1.8	手 ^{マイナ} 入 ^ズ	全体	24.5	28.2	23.6	23.6
	男	7.3	49.1	43.6	0		男	27.3	29.1	25.5	18.2
	女	9.1	25.5	61.8	3.6		女	21.8	27.3	21.8	29.1
	男20代	10.0	55.0	35.0	0		男20代	22.5	30.0	27.5	20.0
	女20代	7.5	32.5	55.0	5.0		女20代	22.5	25.0	22.5	30.0

「童貞」は男性では男性の全体、20代とも^{マイナ}プラスイメージと答えた人が最も多かったが、女性は「どちらでもない」と答えた人が多く、110名全体の率としては、どちらでもない52.7%、プラス37.3%、マイナス8.1%となっている。男性の20代のプラスが最も高率である反面、同じ男性の20代がマイナスと答えた率も10.0%で最も高かった。

「生娘」は①プラス、②どちらでもない、③マイナスの順となっているが、女性の方がプラスと答えた人の率が高く、20代では70%（女性）と45%（男性）と差が大きく開いている。20代男性では30%が「どちらでもない」と答えている。

「処女」も女性の方がプラスと答えた率が高く、男性ではプラスと「どちらでもない」が接近している。

「童貞」も「処女」もその語の属する性の側の方で相手側より高く評価されることがわかる。

(4)全体としてみると、女性側ではプラス評価のものはなく、マイナス評価のものは「色女」、「男嫌い」、「男狂い」の3語である。男性側でもプラス評価のものはなく、マイナス評価のものは「女たらし」、「色魔」など6語である。

(5)には、行為、動作によっておこる状態と動作、行為そのものを代表する人物についての語をまとめた。数の上では女性側で「お転婆」、「コケッ」など28語、男性側で「奸臣」、「どら息子」など29語で、ほぼ同数である。

評価の面では、女性側のプラス評価のものは「大和撫子」1語で、マイナス評価は「あはずれ」、「蓮っ葉」など7語、男性側でプラス評価のもの「剣豪」、「ヒーロー」の2語に対しマイナス評価のもの「凶漢」、「与太者」など12語である。

(6)にはその人物のおかれた状態を表わす語を集めた。女性側の語としては「出戻り」、「紅一点」など15語、男性側の語では「男やもめ」、「チョンガー」など9語であった。女性側の語の方が多いのは、「出戻り」、「行き戻り」のような結婚の不幸な結末を表わす語が女性側にのみあること、「子持ち」が女性を示す語とされることなどによる。

イメージでは女性側で、「看板娘」、「ヒロイン」、「紅一点」の3語がプラス評価、「後家」、「出戻り」、「やもめ」などマイナス評価が5語、男性側で「男一匹」の1語がプラス評価、「男やもめ」、「男囚」、「やもめ」の3語がマイナス評価であった。

(7)は「貴殿」、「愚僧」など待遇関係を表わす語を集めた。ここに属する女性側の語は1語もなく、男性側の語は22語あった。これらの語は対外的

人間関係と共に生じる語であるが、ここに女性側の語がゼロ（『小日国』には「貴嬢」、「貴女」などがあるが『岩国』には採録されていない）ということは、女性が社会的、対外的関係をもつ存在として意識されることがなかった、（あるいは少なかった）ということを示している。

(8)は身分からくる状態を表わす語である。女性側は「貴婦人」、「乳母」など6語、男性側は「貴公子」、「紳士」など8語である。

イメージは女性側でプラス評価のもの「貴婦人」、「レディー」、「聖女」の3語、マイナスのものなし、男性側もマイナス評価のものはなく、プラス評価のものは「貴公子」、「ゼントルマン」、「神君」、「紳士」の4語である。

(9)には複数の人物を表わすものを入れたが、ここには男性側の語に「両雄」「万夫」の2語があったが、この種の語は女性を表わすものにはなかった。

以上の語の中で、イメージ調査で、半数以上がブランクにしたもの（語そのものがわからない、判断がつかない）は男性側の語では「懦夫」、「万夫」「殿原」、「奸雄」の4語、女性側の語では「閨秀」、「たおやめ」、「刀自」、「莫連」、「パンプ」、「フラッパー」、「ブルネット」、「明眸」「明眸皓齒」、「ワンサガール」の10語であった。20代に限るとこのほかに、「奸臣」、「猯下」、女性側の語では「悍婦」、「コケット」、「青踏」が加わる。これらの語は現代語として半数の人にしか認識されていない語ということになる。

(E) 男女関係を表わすもの [表10]

[表10] (E) 男女関係を表わす語

女性を表わす語				男性を表わす語			
愛妾	おてつき	お部屋様	思い者	おとこかけ 男妾	姦夫	ジプロ	情夫
姦婦	妻妾	情婦	側室	男妾	つばめ	ひも	間男
そばめ 側妻	寵姫	寵妾	てかけ	間夫	めがたき 女敵	若い つばめ	
内妻	二号	めかけ	ラシャ め				

ここには、正式の婚姻の状態にはないが、肉体関係にある女性、男性を表わす語を集めた。女性側が16語であるのに対し、男性側は11語である。女性側の語の大部分は「めかけ」「てかけ」など、男性に妻以外の形で囲われる存在の女性を示す類義語である。この中には「二号」、「そばめ」などその存在自体を表わす語と、「愛妾」「寵姫」などその状態を表わす語がある。この種の語が16語のうちの14語を占めている。

男性側の語でこれに相当するのは「男妾」で音読みの語と訓読みの語と出ているから2語になっている。この語は「妾」に「男」と冠したものであるという語の成立の面で、(C)で述べた「女医」に相当する。つまり「医者」が男の領域であったところへ女性の登場をみて「女医」という語ができた、と同じように、ここでは「妾」が本来女性のものだが、あとから男性にも同じような存在の人物が表われて、「男妾」という語ができたということである。この
だんしょう おとこめかけ
「男妾」、「男妾」の2語と類義語「ジプロ」が、女性側の14語に対応することになる。女性側の「めかけ」、「てかけ」類以外の語は「姦婦」と「情婦」であり、これらは男性側の「姦夫」と「情夫」に相当する。

男性側固有のものとしては「つばめ」、「ひも」など6語ある。

このうち「つばめ」、「若いつばめ」は、女性に対して従属的な関係にあるが、女性の男性にとっての「妾」のように固定的で配偶者の代行のような存在ではない。

「ひも」は「情婦の行動をしばって働かせて暮している男」と語釈がなされているように、主体的、積極的に女性を支配している男性である。

「間男」、「女敵」は同じような状況の人物をさしているが、前者は「夫のある女と関係を結んだ男」であり、後者は「自分の妻を奪った男」でこの語の発想の主体は被害者たる夫になる。

以上、結婚していないが肉体関係にある男性と女性を表わす語をみたが、女性の側のほとんどは、男性に経済的に依存し囲われる「妾」に類する語であった。男性側の語は「男妾」のように「妾」に相当するものは3語で、それ以外は、一時的に女性に従属する「つばめ」のようなもの、女性を利用し操る「ひも」のようなもの、他人の妻との不倫な関係の人物を表わす語と、その関係のあり方は多様である。

[表11] [F] 女性自身、男性自身を表わす語 (50音順→)

女性を表わす語					
乙女	乙女子	おなご 女 子	おなごしゅ 女 衆	おみな 女	おんな 女
女の子	おんなわらべ 女 童	ガール	彼女	クーンヤン	児女
少女	女史	女子	女児	女性	信女
大姉	たば	童女	にょしょう 女 性	にょにん 女 人	[婦]
婦女	婦女子	婦人	マダム	マドモ アゼル わらわめ 童 女	ミス
ミセス	[女]	メッチェン	幼女		(35語)

男性を表わす語					
お [男]	男	男衆	男の子	おのこ	彼
居士	少年	信士	男子	男児	男性
丁	ボーイ	ミスター	ムッシュー		(16語)

[F] 女性自身、男性自身を表わすもの [表11]

「女の子」、「男子」のように、性別を明らかにすることを目的とする語をここに集めた。年齢段階の相違も表わす「幼女」、「乙女」などの語は[D]の(1)に属するようにも思われるが、ここでは年齢的条件を表わすというよりその年齢段階の「女」を表わすことを主眼としていると解釈して、この[F]に入れた。

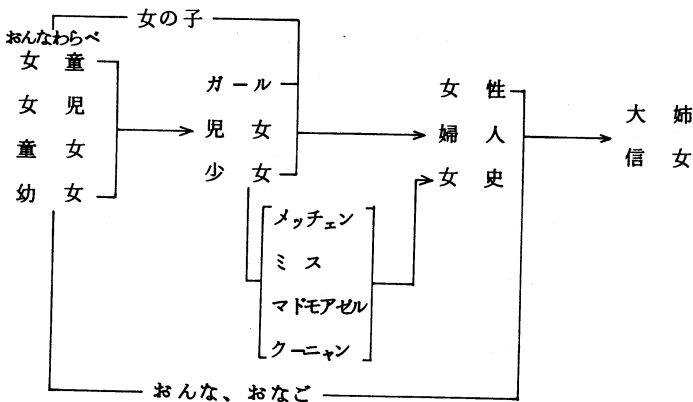
総数では女性側の語35語に対して男性側16語と女性側の方が2倍以上を占めている。この理由は①女性側に「女子」、「女」、「女」、「女人」と類義語が多いこと。②「婦女」、「婦人」、「マダム」など既婚であることを明確にする語が6語あること。③幼年年齢の男の子を表わす語はないが、女の子には「幼女」、「童女」、「女童」などがあること。④「クーンヤン」「メッチェン」は、中国語、ドイツ語からの外来語であるが、これに相当する男性側の語は日本語となっていないこと、の4つの理由によるものである。

②に述べたことは、女性の場合は未婚か既婚かの区別が問題になるが、男

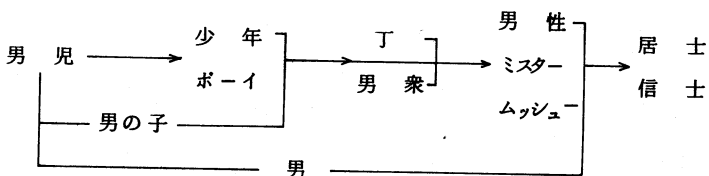
性の場合はそれは問われない事実を反映している。これは英語、フランス語においても、成人男性は「ミスター」、「ムッシュ」各1語で代表されるが、女性の場合は「ミス」か「ミセス」かの、「マドモアゼル」か「マダム」かの区別があるのと同じことで、日本語に限った現象ではない。ただし、アメリカでは最近、Ms というミスもミセスも区別のない語が作られ、普及しつつあるようだ。

(注1)
この[F]のグループに属する語で、女性、男性の一生を図示してみると、男性の場合は単線的であるが女性の場合は複線的であることがわかる。

[女性の一生]



[男性の一生]



注1. 『言語生活』1972年4月号「ことばのくずかご」

[表 1 2] [G] 特殊な人物を表わす語

女性を表わす語				男性を表わす語			
イブ	鬼女 せんじょ	佐保姫 せんじょ	織女	アダム	牽牛	山男	雪男
女神	仙女	仙女	龍田姫				
天女	天人	人魚	ニンフ				
弁財天	魔女	女神	山うば				
雪女							

[G] 特殊な人物を表わすもの [表 1 2]

『岩国』の方針として固有名詞はとらないと書かれているが、「アダム」「イブ」は採録されている。固有名詞というより特殊な存在として掲載されているのであろう。このような特殊な存在としての語は女性側に圧倒的に多い。これは①「仙人」、「神」の語は男性と限定されていないからこの調査では採取しなかったが、「仙女」、「女神」など女性側のものは女性に限定されているから採取した ②「天人」、「天女」といずれも女性を表わす語が類義語としてあること ③「人魚」、「ニンク」のように女性側にしかない語があること ④「佐保姫」、「龍田姫」のように具体的な女神の名前があるが、男性側にはこれに相当するものがない、などの理由による。

ま と め

見出し語の女性を表わすことば、男性を表わすことばを以上のように[A]~[G]のグループに分けて考察してみた結果、次のようなことがわかった。

- (1) 血縁関係の語の中で、出生の順位を表わす語は男性を表わす語に多い。
- (2) 婚姻関係の語の中で、妻に関する語（どんな妻かを表わす語、だれの妻かを意味する語、どのようにして妻となったかを示す語など）が多い。

- (3) 待遇関係を表わす語は男性を表わす語の方が多い。
- (4) 遊女、娼妓、妾を表わす語が多い。
- (5) 容姿の美醜に関する語が、女性を表わす語に多い。イメージはマイナス評価のものの方が多い。
- (6) 女性そのもの、男性そのものを表わす語では、女性そのものを表わす語の方がバラエティに富んでいる。
- (7) 仮空の人物は女性を表わす語の方が多い。

以上から、辞書にみる現代日本語として、女性を表わす語に、男性との関係で生じるものが多いのに対し、男性を表わす語には、対社会的関係で生じるものが多いという傾向が明らかになった。特にこれらの語は伝統的、歴史的背景から生まれたものが多かった。

女性、男性を表わすことばの存在と、実社会での女性、男性の存在とはイコールではない。しかしことばは事実の追認であり、またことばが現象を規定するものであることを考えるなら、両者の関係の深いことも認めなければならない。

以上の考察は一辞典を通じて行なったものであり、そこに現代日本語のありようの反映をみると同時にその辞書の編集の立場、方針の投影をみた。この両者を混同してはならないし、そこに現代日本語研究としての限界も認めなければならない。

国語辞典についていえば、その編集に際して、ある語が単に歴史的存在としての記述を意図されたものであったとしても、一旦採録されると、その語が市民権を得て一人歩きしはじめることもある。また「ある言葉を使うことによってわれわれのものの見方なり思考なりが、その言語の構造に従ってある特定の方向へ規定づけられるのではないか」と考えるならば、辞書の語の採録の可否を決めるのに慎重の上にも慎重を期してほしいと思う。^(注1)

注 池上嘉彦著『意味の世界』 (日本放送協会 1978)

(東海大学、早稲田大学講師)